

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：64302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520852

研究課題名(和文)日本の朝鮮植民地統治と軍

研究課題名(英文)Japanese Colonial Rule of Korea and the Army

研究代表者

松田 利彦(Matsuda, Toshihiko)

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：50252408

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：国内外の調査において、国会図書館憲政資料室に所蔵されている朝鮮駐劄軍司令官・参謀長の書簡の悉皆調査を行ったこと、大谷喜久蔵韓国駐劄軍参謀長や松川敏胤朝鮮軍司令官の日記を発掘した。成果として、第一に、日露戦争期から第一次世界大戦期にかけての朝鮮駐屯日本軍・憲兵の朝鮮支配構想を上記の大谷や松川の日記や具体的な人物に即して明らかにした。第二に、1930年代の朝鮮総督の思想と行動を、宇垣一成や南次郎の書簡を通じて陸軍指導者という側面から分析した。

研究成果の概要(英文)：Through the research in and out of Japan, I have gotten some remarkable achievements; complete enumeration of letters to the commanders and the chiefs of staff of the garrison army in Korea and the discovery of the unknown diary of Otani Kikuzo and Matsukawa Toshitane.

First I clarified what the Japanese army leaders thought about the Colonial Korean Rule and expansion into Chinese Continent between Russo-Japanese War and the World War I. Second, I analyzed the acts of Korean Government generals in 1930's from the view points of the army leaders, referring to the letters of Ugaki Kazushige and Minami Jiro.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：陸軍 植民地 朝鮮 憲兵 大陸政策

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の松田利彦は、2005年以降朝鮮憲兵隊及び日本陸軍の大陸政策における朝鮮問題に関して、いくつかの関連論文を公表した。その過程で、植民地軍の治安維持機能と帝国拡張侵略政策の両面を有機的に結合させてとらえる必要を痛感するにいたった。

他方で、朝鮮軍・朝鮮憲兵隊の首脳が、併合以後、第一次世界大戦期にかけて、治安維持よりも中国大陸への進出により大きな関心を寄せた点に着目してきた。

今後の研究は、こうした朝鮮軍の複合的機能に着目しつつ、研究の射程を特に1920年代以降、満洲事変期にまで広げようとした。

2. 研究の目的

本研究「日本の朝鮮植民地統治と軍」は、植民地朝鮮に駐屯した日本軍の構想と役割を、特に1920年代を中心として明らかにすることを目的としている。

第一に、朝鮮軍が植民地統治をどのように見ていたのかについて考える。1919年以後、陸軍による植民地支配が後退し、朝鮮では、憲兵警察制度の廃止、斎藤実総督による在朝鮮師団増師要求への対応、「文化政治」への批判的視線、中朝国境接壤地帯での抗日民族運動の活発化への対処など、この時期、朝鮮軍は朝鮮統治上の多くの問題に関わることになる。これらの問題についての朝鮮軍関係者の具体的な反応や対応を一次史料から跡づける。第二に、朝鮮軍（あるいは陸軍全体）の帝国拡大構想が朝鮮にどのような位置づけを与えていたかを明らかにする。特に研究史上空白となっている1920年の間島出兵と1931年の満洲事変の間の10年間についての大陸政策構想に重点を置きたい。朝鮮軍は、間島出兵以降、在中国日本領事館の要請で国境を越えて出動することはあっても、他方で国境

警備を軍が担うことに積極的ではなかったと見られる。このような抑制的姿勢が満洲事変時の越境出兵にどのように変わっていくのか、探っていく。

3. 研究の方法

(1) 文献の購入：初年度を中心に本研究関連の基礎文献や公刊史料を購入し先行研究を整理すると共に、本研究全体を貫く分析枠組みを探索する。

(2) 国内外の史料調査の実施：国内の史料調査については、京都で、京都大学の中央図書館、法学部図書室、人文科学研究所図書室、および国際日本文化研究センターが所蔵する新聞・雑誌類の調査を行った。東京等では未公開一次史料の調査を国立国会図書館憲政資料室、防衛庁防衛研究所図書館、外務省外交史料館、国立公文書館所蔵の公文書、国文学研究資料館、靖国偕行文庫、彰古館、仙台市博物館、自衛隊松本駐屯地、同福知山駐屯地、岡山大学等で行う。加えて、個人所蔵の文書については、所蔵者と直接コンタクトをとり、利用の許可を得た。国外の史料調査は、韓国、朝鮮民主主義人民共和国、台湾、米国、スウェーデンで実施する。

(3) 研究成果の公表：日本・韓国・フランスで成果を口頭発表及び学術論文の形で発表する。

4. 研究成果

(1) 平成23年度：国内外の資料調査は以下の通りである。韓国(8月)調査においてソウル大学で日本統治期の雑誌・新聞・京城帝国大学関係資料などを調査した。台湾調査(11月)では、台湾大学・中央図書館台湾分館などで、大学関係文書、植民

地期の雑誌・新聞の調査を行った。また、福岡の調査（9月）では、九州大学・九州歴史資料館で朝鮮駐軍関係刊行物・写真集・個人文書を収集し、第78聯隊関連史跡を調査した。岡山大学での調査（1月）では軍陣医学に関する資料を調査した。8回にわたる東京での調査では、国会図書館憲政資料室・国立公文書館などを中心として、明石元二郎・立花小一郎などの朝鮮支配に関わった陸軍高級将校の個人文書の調査に重点を置いた。

また、文献購入としては『桂太郎日記』『上原勇作日記』など基本資料の復刻が相次いだので、購入に努めた。

成果物としては、「総力戦体制の形成と展開」（趙景達編『植民地朝鮮 その現実と解放への道』東京堂出版、2011年9月、210～232頁）、「植民地警察はいかにして生みだされたか 日本の朝鮮侵略と警察」（林田敏子・大日方純夫編『近代ヨーロッパの探究 13 警察』ミネルヴァ書房、2012年1月、369～416頁）などを論文として発表した。また、「植民地帝国の中の地域社会：朝鮮史研究における成果と課題」（国際日本文化研究センター国際研究集会「植民地帝国日本における支配と地域社会」における基調報告、2011年7月14日、国際日本文化研究センター（京都市西京区）にて行う）、「比較植民地大学史の可能性／不可能性」（国際日本文化研究センター国際研究集会「帝国と高等教育 東アジアの文脈から」における報告、2012年2月11日、国際日本文化研究センター（京都市西京区）にて行う）などの口頭発表を行った。

（2）平成24年度：国内外の資料調査は以下の通りである。6回にわたる東京での調査では、国会図書館・東京大学・国立公文書館などを中心として、朝鮮駐屯日本軍の司令官・参謀長の個人文書の調査に重点を置き、特に国会

図書館憲政資料室所蔵の関連書簡について調査を終えた。国内では、ほかに仙台市立博物館、福知山駐屯地での資料収集を行った。

海外調査は5回行った。朝鮮民主主義人民共和国を学術調査団の一員として訪問し、日露戦争の遺跡、朝鮮労働党関係の資料などを見たほか朝鮮社会科学研究院の近代史研究者と意見交換の機会を持った。韓国では3回調査を行ったが、韓国中央図書館・国会図書館などソウルでの文献調査以外に、全羅南道地方でフィールドワークを行った。また、アメリカ東海岸に出張し、スタンフォード大学フーバー研究所、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館で、日本陸軍関係者の個人文書、朝鮮駐屯日本軍作成資料などを収集できた。

成果物としては、編著書『地域社会から見る帝国日本と植民地 朝鮮・台湾・満洲』（思文閣出版、2013年3月）をまとめたほか、『植民地帝国日本における支配と地域社会』（国際日本文化研究センター、2013年3月）、『帝国と高等教育 東アジアの文脈から』（国際日本文化研究センター、2013年3月）を公刊した。口頭発表としては、2012年6月に、韓国高麗大学韓国学研究所主催シンポジウムで「韓国駐軍参謀長・大谷喜久蔵と韓国」の発表を行った。また、先述の仙台調査で入手した松川敏胤朝鮮軍司令官の日記をもとに、「日本陸軍の大陸政策と朝鮮」を朝鮮近現代史研究会で口頭発表した。

（3）平成25年度

平成25年度における国内外の資料調査は以下の通りである。4回にわたる東京での調査では、国会図書館・東京大学近代日本法政史料センター・国立公文書館などを中心として、朝鮮駐屯日本軍の司令官・参謀長の個人文書の調査に重点を置いたほか、朝鮮に駐屯していた連隊の編纂した連隊史の調査を行った。国内では、ほかに岡山大学、陸上自衛隊松本駐屯地秀峰館で資料収集を行った。海

外出張は3回行った。フランス・パリでシンポジウム「世界の中の憲兵：フランス革命から今日まで」で「Kempei and the Expansion of Imperial Japan in Taiwan, Korean and China at the Beginning of the 20th Century」の発表を行った後、オランダ・ハーグで旧日本軍捕虜関係史跡の調査、スウェーデン・ストックホルムの国立公文書館で植民地所在連合軍捕虜主要書に関する資料の収集にあたった。中国・海南島では、日本軍占領期の朝鮮人軍属関連の史跡を調査した。韓国では、韓国中央図書館・釜山歴史博物館などでの文献調査以外に、全羅南道順天・小鹿島でフィールドワークを行った。

成果物としては、共編著『帝国日本と植民地大学』（ゆまに書房）をまとめたほか、「韓国駐劄軍参謀長・大谷喜久蔵と韓国 大谷関係資料を中心に」（鄭昞旭・板垣竜太編『日記が語る近代 韓国・日本・ドイツの共同研究』同志社コリア研究センター）、「東亜聯盟運動に参加した朝鮮人 曹寧柱と姜永錫」（趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄編『東アジアの知識人』第4巻、有志舎）等を公刊した。口頭発表としては、2013年6月に先述のパリでの植民地憲兵に関する発表を行い、2014年2月に「朝鮮総督在任期の南次郎と陸軍の派閥」を京都大学人文科学研究所「戦時期朝鮮社会の諸相」班で発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

松田 利彦、「序 相互参照系としての植民地朝鮮と台湾」、『(第40回 国際研究集会報告書 植民地帝国日本における支配と地域社会) 査読無、40巻、2013年、7~13頁

松田 利彦、「植民地大学比較史研究の可能性/不可能性」、『(第42回 国際研究集会報告書) 帝国と高等教育 - 東アジアの文脈から』、査読無、42巻、2013年、7~15頁

松田 利彦、「植民地支配と地域社会 - 朝鮮史研究における成果と課題」、松田利

彦・陳ジョン湊共編著『地域社会から見る帝国日本と植民地 - 朝鮮・台湾・満洲』、査読無、2013年、25~48頁

松田 利彦、「植民地期朝鮮における消防組について」、松田利彦・陳ジョン湊共編著『地域社会から見る帝国日本と植民地 - 朝鮮・台湾・満洲』、査読無、2013年、99~130頁

〔学会発表〕(計8件)

松田 利彦、「朝鮮学校における近年の“変化”をめぐって」、青巖大学在日コリアン研究所主催シンポジウム「在日コリアンの生活文化と変容」、2013年6月29日、大阪教育大学(大阪市)

松田 利彦、「Kenpei and the Expansion of Imperial Japan in Taiwan, Korea and China at the Beginning of the 20th Century」、ソルボンヌ大学・国立歴史学会共催“Colloque Gendarmeries dans le monde”、2013年6月14日、Ecole Militaire(フランス・パリ市)

松田 利彦、「日本陸軍の大陸政策と朝鮮」、朝鮮近現代史研究会、2013年3月10日、青丘文庫(神戸市)

松田 利彦、「在日コリアンとニューカマー問題」、青巖大学在日コリアン研究所主催シンポジウム「在日コリアンDiasporaの形成と展開 - 移住と定住を中心に」、2012年8月23日、韓国・青巖大学(韓国・全南順天市)

松田 利彦、「韓国駐国駐劄軍参謀長・大谷喜久蔵と韓国 - 大谷関係個人史料を中心に -」、高麗大学韓国学研究所主催シンポジウム「日記を通じてみる近代と伝統」、2012年6月8日、韓国・高麗大学(韓国・高麗市)

松田 利彦、「比較植民地大学史の可能性/不可能性」、国際日本文化研究センター国際研究集会「帝国と高等教育 - 東アジアの文脈から」、2012年2月11日、国際日本文化研究センター(京都市)

松田 利彦、「植民地朝鮮における民衆と“近代”」、台湾史研究所主催講演会、2011年11月25日、台湾・中央研究院台湾史研究所(台湾・台北市)

松田 利彦、「植民地帝国の中の地域社会：朝鮮史研究における成果と課題」、国際日本文化研究センター国際研究集会「植民地帝国日本における支配と地域社会」、2011年7月14日、国際日本文化研究センター(京都市)

〔図書〕(計11件)

酒井 哲哉・松田 利彦、ゆまに書房、『帝国日本と植民地大学』、2014年、638頁
鄭 昞旭・板垣 竜太編、同志社コリア研究センター、「韓国駐劄軍参謀長・大谷喜

久蔵と韓国 - 大谷関係資料を中心に』『日記が語る近代 - 韓国・日本・ドイツの共同研究』、2014年、397頁

趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄編、有志社、「東亜聯盟運動に参加した朝鮮人 - 曹寧柱と姜永錫」、『東アジアの知識人』第4巻（戦争と向き合って 満州事変～日本敗戦）2014年、396頁

青巖大学校在日コリアン研究所編、図書出版ソニン、「在日コリアンとニューカマー問題」、『在日コリアンディアスポラの形成 - 移住と定住を中心に』、2013年、382頁

黄 自進主編、中央研究院人文社会科学研究センター、帝国日本の政策連鎖 - 内務官僚の植民地への移入と「地方改良運動」、『東亜世界中の日本與台湾』、2013年、365頁

笹川 紀勝監修、邊 英浩・都 時煥編、明石書店、「韓国駐節軍参謀長・大谷喜久蔵と乙巳保護条約締結前後の韓国」、『国際共同研究 韓国強制併合一〇〇年 歴史と課題』、2013年、493頁

松田 利彦・陳ジョン潁共編著、思文閣出版、『地域社会からみる帝国日本と植民地 - 朝鮮・台湾・満洲』、2013年、828頁

酒井 哲哉・松田 利彦共編、国際日本文化研究センター、『帝国と高等教育 - 東アジアの文脈から』、2013年、265頁

松田 利彦・陳ジョン潁共編著、国際日本文化研究センター、『植民地期日本における支配と地域社会』、2013年、186頁

林田 敏子・大日方純夫編、ミネルヴァ書房、『近代ヨーロッパの探求 13 警察』2012年、463頁

趙景達編、東京堂出版、『植民地朝鮮 その現実と開放への道』、2011年、321頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田 利彦 (MATSUDA Toshihiko)

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：50252408